

穂谷自然再生プロジェクト ——市民とともに未来へつなぐ里山の再生——

文・写真 夏原由博(当代会長)



図-1 枚方市穂谷の位置図(枚方市ホームページより)

枚方市穂谷では、2024年からアメリカの生態系修復学会 (SER) を通じて、マイクロソフト社とエアトランク社の助成を受け、里山の自然再生に向けた新たな取り組みを進めています。竹林の拡大や棚田の放棄によって失われつつあった里山の生態系を取り戻し、地域の暮らしや文化と結びつけながら、次世代へ継承できる風景を再びつくり出すことが私たちの目標です。

穂谷という地域の成り立ちと変遷

穂谷は、河内・山城・大和の三国境に位置し、古くから文化が交差してきた地域です。家屋には大和棟の様式が見られ、江戸時代には三輪そうめんの技術を取り入れた河内そうめんづくりが盛んでした。1698年には造り酒屋が創業し、伏見へ酒を卸すなど、農と文化が密接に結びついた土地でした。近年はそうめんや酒造は廃業したものの、有機農業やクラフトビール、竹を活用したメンマづくりなど、新しい地域おこしが芽生えています。

穂谷の山には断層による破碎帯があるため、1797年から1822年にわたって、土砂方奉行所が98カ所の山留を設けるとともに、411カ所に対して34万株の雑木および芝を植えさせました。明治40年の地図では草山は見られず、西側はアカマツ林、東側は落葉広葉樹林で一部に茶畑があります。穂谷の山林は歴史的に村人が共同で所有管理し、

土地所有権(底地権)、入会権、立木支配権という3つが設定された複雑な権利関係を持っていました。入会山では、松の伐採禁止や親指以上の太い枝の採取の禁止、などの制限がありました。これらの制度が雑木林の持続性を支えてきたと考えられます。

しかし、1961年の空中写真や1967年の地図では伐採され草地になった部分が見られます。そうした場所に竹が侵入あるいは移植されたようです。戦後、谷には棚田の面積が増えました。しかし1970年代には棚田の耕作放棄が始まるとともに竹林が拡大し、現在では棚田部分の水田は2カ所で、斜面の大部分が竹林となっています(図-2)。放棄水田にはネザサやセイタカアワダチソウが侵入し、かつては普通に見られたキキョウやミズオオバコなどが見られなくなりました。竹林には里山林に見られたササユリなども見られず、鳥の声も聞かれません。

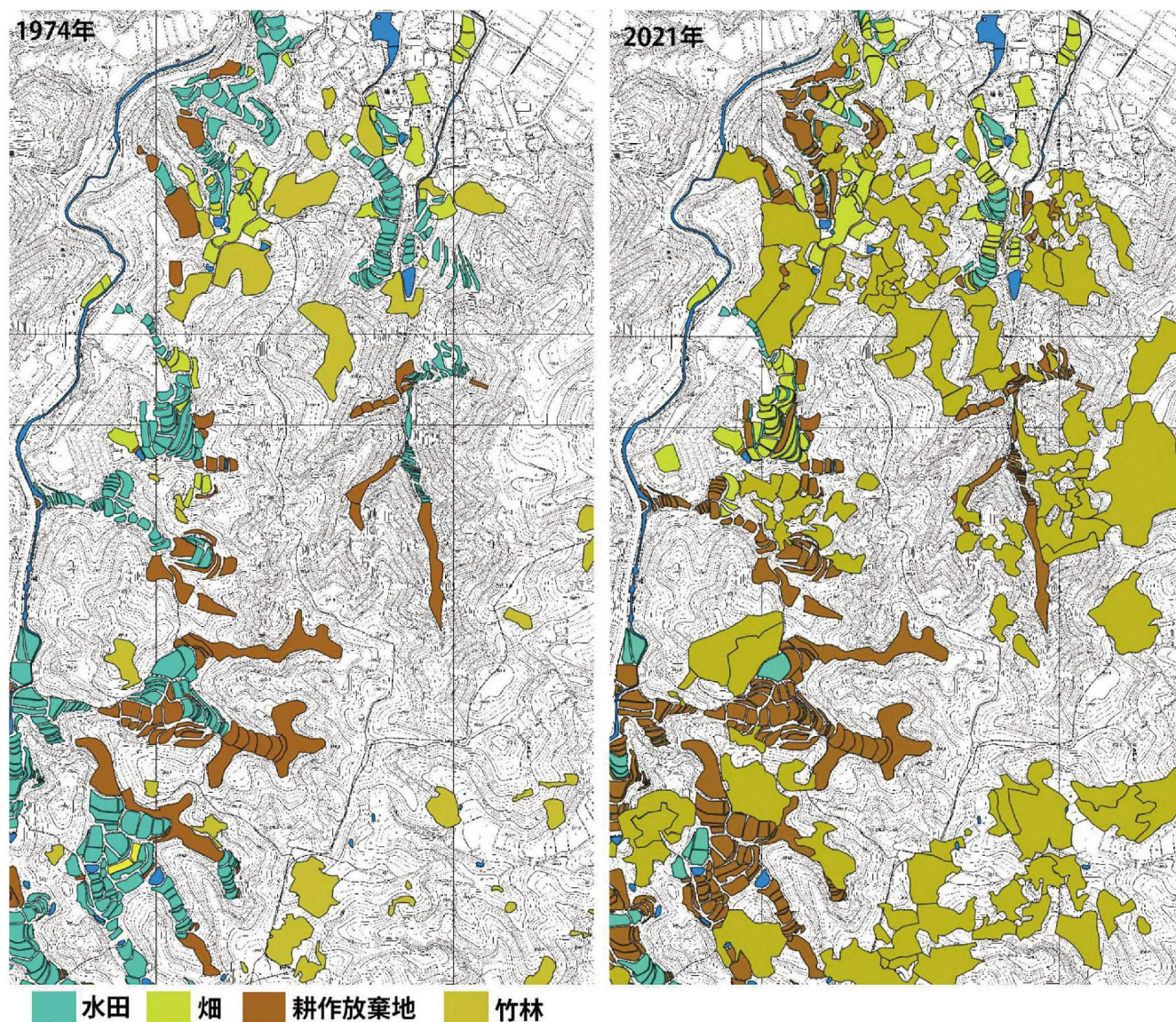


図-2 穂谷の竹林と農地の変化。左1974年、右2021年。

さらに近年ではイノシシとアライグマによる獣害が穂谷山間部での農業の維持を困難にしています。イノシシは後述の里山動物調査では記録が無く、2010年にモニタリング1000の自動撮影によって確認されました。

穂谷の里山保全の歩み

穂谷が「都市と自然」に現れるのは1989年からで、里山動物調査の記録があります。1998年ころから枚方自然ハイキングが始まり、1999年に里山一斉調査のコースに加わりました。同年枚方市の事業

「夏休み穂谷自然探検隊」に講師を派遣しています。

枚方市では1990年に自然環境調査報告書を刊行し、市民参加の自然環境調査は1998年以来ほぼ5年ごとに実施しています。2000年から2年間実施した第3回調査（枚方ふるさといきもの調査）では保全協会が調査業務を受託して市民調査を企画し報告書を作成しました。2011年にも保全協会が調査業務を受託しています。そうした調査によって穂谷の重要性が改めて示されました。

2002年には枚方市が「里山管

理者養成講座」を開始しましたが、講座運営は保全協会里山委員会によって進められました。その修了生が「里山の会・氷室」を結成、現在は「里山の会・穂谷」として、穂谷地区の奥の谷、ワセダを中心に活動しています。また、枚方いきもの調査会が発足し、穂谷を含めた調査活動を始めました。保全協会では里山管理計画を作成し、竹を伐採して落葉広葉樹林に転換することや放棄水田をビオトープとすることなどの作業を始めました。

2004年に枚方市は里山保全構想を発表します。そこでは、里山を



図-3 日本の里100選に選定された穂谷の水田（2005年10月撮影）。今はもう無い。



図-4 地権者さんに設置していただいた作業小屋。

非常に重要な環境要素と位置付け、保全の推進と開発の抑制に努めるとしています。その実現のために、森づくり委員会のような組織を立ち上げ、市民との協働や支援を進めていくとしています。

2005年には穂谷が環境省のモニタリング1000の里地調査のコアサイトとなり、当協会がその運営を委託されました。調査メンバーには「枚方いきもの調査会」や協会の「枚方しぜんハイキング」などのメンバーが参加しています。2006年に枚方市によって「森づくり委員会」が発足しました。これは、林の保全、整備活動を進めるための調整とか、調査研究を行うもので、穂谷区やボランティア団体、関西外大、大阪府と枚方市によって構成され、保全協会もそのメンバーとなりました。委員会では、「美しい生命あふれる田園地域である穂谷の里山・里地を守り、他にはない、魅力あふれる地域として、後世に伝えていきたい」という目標のもとに、意見交換、調査、森づくりニュースの発行、住民アンケートの実施、注意板の設置などを行いました。2009年には朝日新聞社と森林文化協会による日本の里100選に2015年に

は環境省による生物多様性保全上重要な里地里山に選定されました（図-3）。

ところが、2015年にコンクリート業者によって穂谷で最も重要な棚田7,000㎡の土が採取され、自然景観が大きく変わってしまいました。枚方市自然環境調査の植物の種数記録を見ると、2011年から2012年に実施された第5回調査では659種であったのが、2021年から2022年にかけて実施された第7回調査では368種と激減しています。ただ、自然景観は変わってしまったものの、穂谷の生物多様性は枚方市内で特筆すべきで、第7回枚方市自然環境調査では、哺乳類12種（調査地中1位）、鳥類39種（5位）、昆虫352種（2位）、両生類爬虫類14種（1位）と報告されています。

新しい自然再生プロジェクトの始動

今回のSERプロジェクトでは、1年目に自然再生作業を行い、2・3年目にモニタリングを継続する計画です。長年穂谷で活動している野田奏栄さんに相談して、穂谷でビオトープをつくっている枚方高校生物飼育部やパナソニックのボランティ

ア組織の事務局長をされていた山口進さん、全国カヤネズミネットワークの畠佐代子さんにも参加していただき、穂谷区の住民から新たに提供していただいた土地を含めて3ヶ所で自然再生を実施しています。また枚方いきもの調査会代表の石川新三郎さんにも助言者として加わっていただいています。地権者の理解を得ることは不可欠であり、2024年5月には枚方市農業振興課と協議し、穂谷区役員の皆さんに説明して協力を得ました。

主な再生地の取り組み

宮之浦（奥の谷池東側）では、竹林整備や棚田の管理など、地域の里山を守るための地道な作業を続けています。バンブーデッキ（集いの場）を設置し、竹を活用した「集いの場」をつくり、市民が里山に触れられる拠点にしています。また、無農薬稲作を実施し、ニホンアカガエルなど水生生物を保護しています。奥の谷池北側では、畑作をされている地権者のご厚意で作業小屋を設置し、竹粉碎機を導入しました（図-4）。

枚方高校生物飼育部は、穂谷の自然再生に積極的に取り組む高校

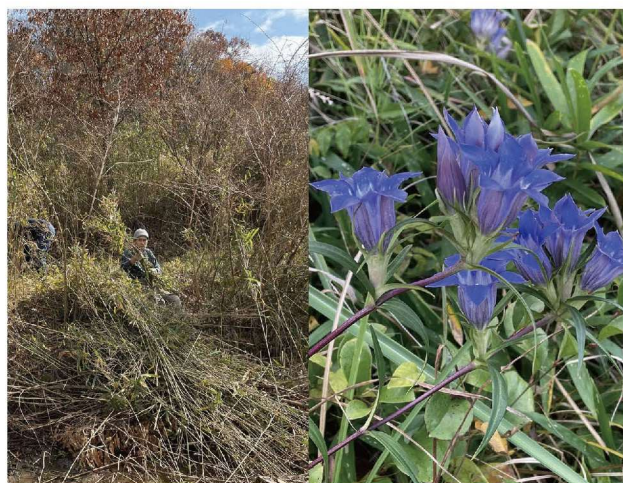


図-5 笹刈り前の放棄水田と刈った後に咲いたリンドウ



図-6 竹を切る大学生

生チームです。彼らが活動拠点としているのは、長年放置され、セイタカアワダチソウに覆われていた一枚の水田。ここを自分たちの手で整備し、今では水生昆虫やカエルが戻るビオトープへとよみがえらせます。2024年にはイオンエコワングランプリで文部科学大臣賞を受賞しています。

穂谷南端の坪尻は、モニタリング1000カヤネズミの調査地ですが、一部のオギ原にヤナギが侵入してました。ヤナギを伐採し、近くからオギを移植してカヤネズミが営巣できるようにしています。隣接する放棄水田のササを刈ったところ、リンドウなどの花が復活しました(図-5)。

大学教育との連携も進んでいます。これまでも穂谷と関わってきた関西外大や大阪公立大、大阪商大の学生に加えて、大阪大学と近畿大学の教員と学生も私たちの活動に参加しました(図-6)。また大阪工大の学生がモニタリング1000の調査に加わっています。

市民とともに育てる 「参加型の里山再生」

自然再生は生態系の回復だけでなく、地域の暮らしや文化を未来へ

つなぐ取り組みでもあります。そのため穂谷の自然再生を市民とともに進めることを大切にしています。具体的にはモニタリング1000や里山一斉調査のような市民参加型モニタリングや里山保全ボランティアの受け入れなどです。さらに竹を使ったメンマづくりや竹の花器づくり、有機農業など、地域資源を活かした試みが生まれています。枚方高校生物飼育部の活動が受賞し新聞に掲載されたことも、地域にとって大きな励みとなりました。里地の中央に位置する畑はひらかた独歩ファームの農家さんによって有機栽培されています。ここで採れた野菜は枚方市内のレストランでも利用されています。2025年12月には、ひ

らかた独歩ファームの農家さんと共同で里道整備を行い、46名ものボランティアが参加しました(図-7)。こうした協働は、地域の未来を支える大きな力になります。

未来へ向けて

里山を守ることは、自然を守るだけでなく、地域の文化や暮らしを未来へつなぐことです。

穂谷の自然再生プロジェクトは、地域住民、学生、専門家、そして市民の皆さんが力を合わせて進める共同の取り組みです。ぜひ穂谷に足を運び、見て、触れて、参加してみてください。活動日は主に水曜日と土曜日で、参加を希望される方は事務局にご連絡ください。



図-7 共同作業後の歓談。湯気は豚汁。